

# 甲府市の遺跡

～甲府市内遺跡詳細  
分布調査報告書～

1986.3

甲府市教育委員会

## 序

山梨県内はもとよりほぼ全国的に言えることでしょうが、ここ数年、各種の開発事業等により遺跡の発見があいついでいます。そのたびに埋蔵文化財の保護が提起され、開発か保護かの論議が絶えません。

甲府市内では、これまでに、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られている遺跡は、古墳を除くと20箇か所でした。しかし、開発途中で新たに発見されたり、あるいは気がつかないまま破壊されてしまう遺跡が後を絶たなかったのが実状です。

このような事態を繰り返し、スムーズな開発と文化財保護を両立させる基礎資料をつくるために、今回の分布調査がおこなわれました。先人たちが何百年も何千年もの間かかってつくりあげてきた文化の遺産を私たちの子孫に残し伝えるとともに、これから歩むべき道を教示することは、現在を生きる私たちに課せられた使命ではないでしょうか。そしてさらに、市制百周年を間近に控えた甲府市が今後大きく発展するためにも、この報告書が広く活用されることを願ってやみません。

文末ではありますが、今回の調査に協力していただきました市民の皆様、調査員の方々に厚く御礼を申しあげ序にかえさせていただきます。

昭和61年3月

甲府市教育委員会  
教育長 楠 恵明

## 例　　言

- 1 本書は昭和60年度文化財保護事業としておこなった甲府市内遺跡群細分布調査事業の調査報告書である。
- 2 調査は国および県の補助事業として、甲府市教育委員会が実施した。
- 3 調査にあたっては、市内の自治会の協力ならびに甲府市財政担当、社会部地域振興課及び市史編纂担当の協力のもとに実施した。
- 4 調査台帳および調査によって発見された遺物は、甲府市教育委員会が保管し、個人所有のものについては、台帳中に所有者を記入してある。

## 凡　　例

- 1 本文中に使用した地図は2千分の1に統一している。
- 2 地図中、散布地・包蔵地・集落跡・城館跡等についてはスクリーントーンで、また、古墳・塚についてはドットで示してある。
- 3 区画については、甲府市の旧市街地及び旧村を単位としている。
- 4 遺跡番号は、各地区に番号を付け、各地域中で枝番を付して記した。

10 - 01

地区番号　　遺跡番号

## 目 次

序	.....	1
例 言	.....	2
凡 例	.....	2
I 調査に至る経緯 .....		5
a 開発と保護 .....	.....	5
b 分布調査の意義 .....	.....	5
II 調査の方法 .....		6
III 遺跡総覧 .....		9
1 旧相川村 .....	.....	9
2 旧大宮村 .....	.....	11
3 旧千塚村 .....	.....	13
4 旧里垣村 .....	.....	14
5 旧甲連村 .....	.....	18
6 旧池田村 .....	.....	21
7 旧貞川村 .....	.....	22
8 旧玉瀬村 .....	.....	24
9 旧国母村 .....	.....	26
10 旧住吉村 .....	.....	28
11 旧大鎌田村 .....	.....	29
12 旧山城村 .....	.....	31
13 旧朝井村 .....	.....	33
14 旧二川村 .....	.....	34
15 旧市城 .....	.....	36
IV ま と め .....		39



# I 調査に至る経緯

## a 開発と保護

「東日本最大の○○発見!! ××遺跡」とか、「△△遺跡は縄文時代の宗教センターか?」とか、考古学の話題が毎日のように新聞紙上を賑わせる昨今である。しかし、新聞に掲載された多くの遺跡は、そのほとんどが、調査終了と同時に開発等によりこの世から姿を消す。山梨県内では、昭和42年から58年までに、288カ所の遺跡が調査されたが、いずれも開発に伴う事前調査であり、ある所は、中央高速道路が走り、またある所では、工場が建てられたりしている。

工事に伴う事前の調査は、緊急発掘調査、あるいは、行政発掘調査等の名前で呼ばれ、山梨県内だけでも毎年數十カ所の遺跡が調査されている。つまり現在の考古学ブームや考古学の學問的、技術的な進歩は、言ってみれば開発とともに歩んできた道なのかもしれない。

文化財保護法に「(前略)遺跡と認められるものを発見した場合は(中略)文化庁長官に届け出なければならない」と規定してあるため、発見された場合は、発掘調査がおこなわれることが多いのである。

遺跡は地中に埋っているまま、つまり何百年も何千年もの間を経過した状態のままにしておくのが最も望ましい。発掘調査では、記録に残すことはできても、当時の生活様式をそのまま残すことはほとんど不可能なのである。しかし開発により破壊されてしまうならば、現在の時点で可能な限りの保護を行い活用に努めるのが、我々に課せられた使命なのである。

開発と文化財保護、明日に向かう都市計画事業と、過去の文化・生活を保護していくことは、まったく正反対の性質のものではあるが、表裏一体化をなしており、いつになんでも共通点が見いだせないような、特殊なつながりがある。

## b 分布調査の意義

先人たちの生活の跡を意味する遺跡、そして彼らの使った道具を意味する遺物などは、地下に埋っているものが多く、そのため“埋蔵文化財”的名称で呼ばれている。では、埋蔵文化財が、仏像や建て物などの文化財と違っている点、強いていうなら、埋蔵文化財の特質は何であろうか。

『土地に埋蔵されている文化財』というのが文化財保護法の中での埋蔵文化財の規定である。この場合の「土地」は、地面ばかりでなく、海底や湖底なども含まれると解釈され、また、塚や古墳など、地上に出ているものも埋蔵文化財として扱われている。これらは、何百年、何千年間にも亘り地中の同じ場所に存在していた。しかし現在の機械文明に対してはあまりにも無防備であり、例えばパワーショベルのひとかきでその歴史を閉じてしまう。地面を50cm掘り下げて作った4本柱の粗末な家であっても、今から何千年も前の人人がつくりあげた立派な文化的遺産である。

従ってその存在を広く知らせて、開発の以前に記録し活用することは、現在の私たちにとっての義務であろう。そしてまた一方では、前もって遺跡の位置や範囲が確認されていることにより、開

発工事の計画段階での対処が可能となり、少なくとも、工事開始後において、埋蔵文化財が発見され、工事期間の延期や計画変更を余儀なくされるという最悪の事態は防ぐことにもつながる。分布調査の実施により、開発と文化財保護とがスムーズに実施できるようになる、と言ってもよからう。

## II 調　　査　　の　　方　　法

今回の分布調査は、建て物の建築、道路の敷設等が行なわれ、近い将来に破壊の危機に直面すると思われる市内平野部で行なった。これは面積にして 78,541 ㎢、市域全体の46%にあたる。

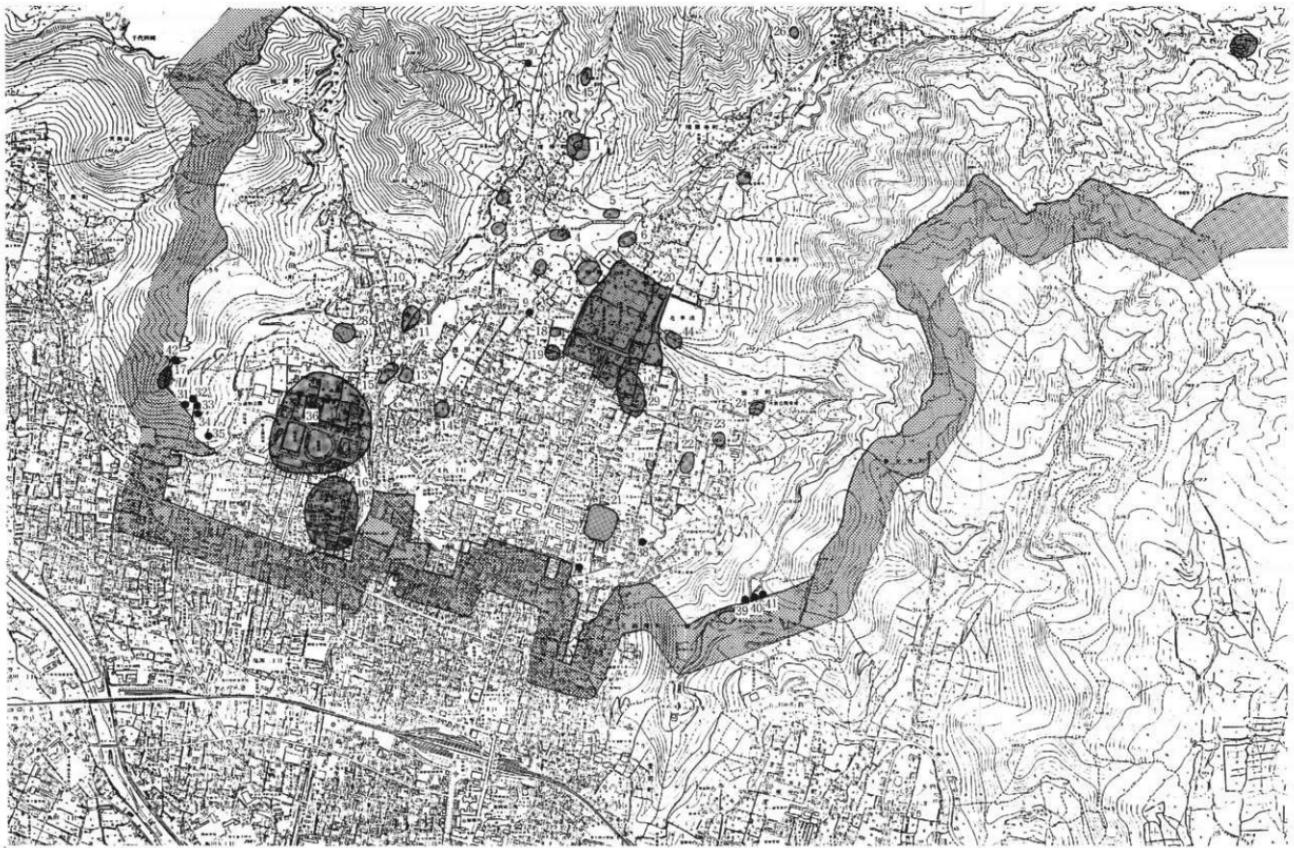
平野部を19の区画に分割し、それぞれに調査員を配し、全面徒歩による調査をおこなった。さらに中心部においては、聞き書きを重視し、現在、建て物等により表面採集が不可能な地域についてもできる限り対処した。また、土木工事等により掘削が行なわれている地域も工事担当者からの聞き書きなどの細かい調査が行なわれた。

しかし、この調査が完璧なものでは決してなく、特に南部においては、河川の氾濫等により多量の土砂が堆積していることも否めないため、今後機会あるごとに補迫していくかなければならないことを、あわせて記しておく。

(調査員) (敬称は略させていただきます。)

新津 健・新津 重子・田村 弘幸・高奥 浩明  
萩原 三雄・十菱 駿武・椎名 懐太郎・山下 孝司  
五味 信吾・安留 誠一・矢崎 照政・田代 孝  
保坂 康夫・日向 千恵・中山 誠二・柳原 功一  
高野 俊彦・古谷 健一郎・数野 雅彦

(以上山梨県考古学協会会員)



### III 遺 跡 総 覧

#### 1. 旧 相 川 村

##### a 概 要

愛宕山と湯村山に挟まれ、相川により開拓された扇状地に位置する旧相川村は、戦国期の名将、武田信玄が居城を構えた所として広く知られている。僕の深い相川扇状地はまさに自然の要害と呼ぶにふさわしく、武田氏館跡の約2km北方には、詰め城としての要害城を、また、西の湯村山にも湯村山城をそれぞれ築き、外敵の襲来に備えている。

館跡の周辺には、二十四将を初めとして、武田家の有力家臣たちの屋敷を配したと伝えられ、小字名から推測することは十分に可能である。館跡すぐ北側の道軒屋敷、西方の土屋敷や御馬屋小路などは家臣団の屋敷にちなんだ名前だと思われるが、必ずしもこれらの地名の場所からは、それを裏付ける遺物の分布や遺構の存在は認められていない。このような情況の中で、御馬屋小路A遺跡において希薄ながら中世の遺物が確認されていることは、古絵図に見られる山本勘助の屋敷跡とも予想される。

相川沿いに点在する数ヶ所の遺跡はいずれも中世もしくは近世であり、平安時代以前の遺跡は確認されていない。しかし、史跡武田氏館跡の範囲内で昭和57年に行なった緊急発掘調査では、绳文時代中期の土器片や石器等、绳文期の遺物が出土していることなどから考え、地中深くに存在していることが予想される。

相川を離れ、愛宕山西麓では、古墳時代の遺物が検出されていた、ということである。しかし現在は宅地化が急ピッチで進み、わずかに残った空地から、該期の資料を得ることは非常に困難であった。相川村東部における古墳時代の遺物の散布は、山本寿々雄氏の教示によるものである。

一方西部においては、相川沿でも弥生時代から平安時代にかけての遺物の散布が多く認められる。緑が丘二丁目の様が丘遺跡は古くから知られていた古墳時代前期から平安時代にかけての大集落の可能性も強く、今回、宅地化等により調査不可能となってしまった地域があるために、2ヶ所に分けたが、両者はつながりさらに扒がる可能性をのぞかせている。

##### b 遺 跡 一 覧 表

番 号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	地 目	備 考
1-1	山 路 遺 跡	塚原町	不 明	畠	散 布 地
1-2	西 前 田 A 遺 跡	塚原町西前田 237 他	中 世・近 世	畠	"
1-3	西 前 田 B 遺 跡	塚原町西前田 250 他	不 明	田 · 畠	"
1-4	御 馬 屋 小 路 A 遺 跡	吉 府 中 町 1237 他	中 世	田 · 畠	"

1-5	不動遺跡	塙原町不動 938他	近世	烟	
1-6	日影遺跡	古府中町 3163他	不明	烟	
1-7	土屋敷遺跡	古府中町 1340他	不明	田・烟	
1-8	御馬屋小路B遺跡	古府中町 1084他	不明	田・烟	
1-9	お塚さん古墳	古府中町 1429-3	古墳	烟	古墳封土残る
1-10	十二天遺跡	小松町十二天 478他	平安	烟・宅地	散布地
1-11	永井遺跡	小松町水井 407他	古墳・平安	田・烟・宅地	"
1-12	村之内遺跡	和田町村之内 2912他	古墳・平安	烟・宅地	"
1-13	向田A遺跡	西田町1他	弥生～古墳	烟	"
1-14	向田B遺跡	北新二丁目 12他	不明	烟	"
1-15	緑ヶ丘二丁目遺跡	緑ヶ丘二丁目・和田町	古墳～平安	田・烟・宅地	"
1-16	緑ヶ丘一丁目遺跡	緑ヶ丘一丁目・塙部	古墳	烟・宅地	"
1-17	湯村山城跡	湯村山山頂	中世	山地	城跡
1-18	観音寺跡	屋形三丁目 8他	近世	烟・宅地	寺社跡
1-19	峰本南遺跡	屋形三丁目 48他	近世	烟	散布地
1-20	武田氏館跡	古府中町字梅翁他	中世	田・烟・宅地・神社	史跡
1-21	山梨大学遺跡	大手二丁目 1	奈良・平安	大学構内	包蔵地
1-22	岩窪B遺跡	岩窪町 150他	古墳	烟	散布地
1-23	岩窪A遺跡	岩窪町 225他	近世	烟	"
1-24	岩窪C遺跡	市営公園墓地内	古墳	墓地	"
1-25	日影田遺跡	下積翠寺町 445他	不明	烟・草地	散布地
1-26	一ノ森経塚群	下積翠寺町一森	中世	山地	経塚3基
1-27	深草観音遺跡	上積翠寺町深草観音	近世	山地	
1-28	三光寺山遺跡	和田町山中	古墳	山地	
1-29	大手下遺跡	大手二丁目 33他	繩文	宅地	散布地
1-30	沈石古墳	塙原町	古墳	烟	横穴式石室
1-31	湯村山5号墳	湯村山山中	古墳	山地	
1-32	湯村山4号墳	"	古墳	山地	
1-33	湯村山3号墳	"	古墳	山地	
1-34	湯村山2号墳	"	古墳	山地	
1-35	湯村山1号墳	"	古墳	山地	
1-36	和田無名墳	和田町	古墳	水田	消滅
1-37	山八幡古墳	宮前町	古墳	神社	
1-38	コツ塙古墳	古府中町 4784	古墳	宅地	消滅

1-39	二ツ塚古墳	子供の国変形 自転車広場内	古 墳	廣 場	
1-40	二ツ塚2号墳	東光寺山南西斜面	古 墳	山 地	
1-41	二ツ塚1号墳	東光寺山南西斜面	古 墳	山 地	
1-42	湯村山6号墳	湯村山山中	古 墳	山 地	石室崩壊
1-43	神宮寺氏屋敷跡	下積翠寺町御所坂下	中 世		
1-44	藤原ヶ崎亭跡	古府中町3392他	中 世	山 林	
1-45	鍾推(演)堂山	塚原町	中 世	山 林	

## 2. 旧大宮村

### a 概 要

荒川の右岸で、湯村山と片山に挟まれた入江状の地域が旧大宮村である。天狗山山頂の積石塚古墳や湯村山西斜面の大平古墳群など全体に古墳の多い地域として知られていた。標高は280m～350m、さらに片山山頂は500mにもおよび、全体的に見ると、北西から南東へと傾斜している。

旧大宮村は、南に続く旧千塚村に比べると古墳以外の、いわゆる散布地・包蔵地は極端に希薄である。現在、水田が多く、從て散布地発見の支障になっていることもあろうが、工事現場などでの上層観察では、地表下1m程で粘土層になる地域もあり、集落の形成に不適な自然条件だったということも否めない。

遺跡として今回確認されたものは、古墳時代から平安時代にかけての散布地および中世の館跡と思われる所で、岡知の占墳が数基あげられる。今回確認された遺跡のうち御藏遺跡は、微高地に立地し、小さな谷を挟んでいるために範囲を画したが、旧千塚村の天神北遺跡、あるいは跡部遺跡と同一の可能性が十分に考えられる。また、米草古墳は、荒川対岸の敷島町牛引にも同時期の古墳の存在が知られており、そしてまた、南に続く千塚の地名などからも、そのつながりについて注意を要しなければならない。また山之神遺跡は、中世の五輪塔が一基認められ、山付き地形ではあるものの中世の館跡の所在が考えられる遺跡である。

### b 遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	地 目	備 考
2-1	米草古墳	山宮町286-5	古 墳	水 田	古 墓
2-2	山之神遺跡	山宮町山之神3116他	中 世	畑・宅 地	跡 跡 か?
2-3	鶴塚遺跡	山宮町鶴塚18他	平 安	畑・宅 地	散 布 地
2-4	御藏遺跡	山宮町御藏772他	古 墳・平 安	田・ 畑	"
2-5	若宮前遺跡	羽黒町若宮前34他	平 安	畑・宅 地	"
2-6	天神平遺跡	羽黒町天神平1195他	平 安	畑・宅 地	"



第2図 旧大宮村遺跡地図

2-7	天狗山古墳	天狗山山頂	古	墳	山	地	積石塚
2-8	羽黒無名墳	羽黒町1225	古	墳	山	地	消滅
2-9	塩沢寺裏無名墳	塩沢寺墓地内	古	墳	山	地	
2-10	大平1号墳	塩沢寺裏	古	墳	山	地	円墳
2-11	大平2号墳	塩沢寺裏	古	墳	山	地	円墳
2-12	万寿森古墳	万寿森ホテル構内	古	墳	宅	地	

### 3. 旧千塚村

#### a 概 要

荒川の左岸、現在の千塚・音羽・富士見一丁目および塩部の地域である。標高は280m~300m程で北西から南東に向い緩やかに傾斜している。段丘および小河川によって開拓された微高地がよく発達した地域である。遺物の散布はこの微高地の畑地を中心として認められており、この範囲を遺跡と考えている。しかし、小谷を越えて一体となる可能性も高いことを合わせて記しておく。

分布調査によって縄文時代から平安時代までの遺跡が確認された。しかしいずれも遺物の量は極めて少ない。また弥生時代の遺跡も、後期の土器片が認められる3ヵ所の遺跡が発見されたが、遺跡が増加するのはやはり古墳時代になってからである。先にも述べたとおり、微高地をもって遺跡としたが、その間の小谷にも遺物の散布が認められるので、広範囲にわたる遺跡になるかも知れない。

古墳時代は「千塚」という地名が示すとおり、かつては古墳が相当数存在していたと思われるが現在では6・7基を残すにすぎない。これら古墳の中でも加牟那塚古墳は、大きな石室を有することから現在では県の史跡に指定されている。古墳と集落との関係については今後検討を要すべき大きな問題であろう。

平安時代の遺跡は、古墳時代のそれと重複しているものが多く、弥生時代以後連續とした生活が営なまれていたことが考えられる。

#### b 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
3-1	天神北遺跡	千塚町天神北3426他	古墳・平安	水田・畠	散布地
3-2	天神西遺跡	千塚町天神西3389他	古	墳畠・宅地	"
3-3	桜田遺跡	千塚町桜田2808他	弥生～平安	水田・畠地	"
3-4	跡部遺跡	千塚町跡部1941他	古	墳	水田・畠地
3-5	金塚西遺跡	千塚町金塚西2188他	縄文・古墳	水田・宅地	"
3-6	神田遺跡	千塚町神田2188他	弥生～平安	水田	畠地
3-7	音羽遺跡	音羽町一帯他	弥生～古墳	水田	畠地
3-8	大坂A遺跡	千塚町大坂	縄文	宅地	"
3-9	大坂B遺跡	千塚町大坂	平安	畠・宅地	"
3-10	八幡東遺跡	千塚町八幡東2316他	弥生・古墳	神社・水田	畠地
3-11	八幡前遺跡	千塚町八幡前	古	墳畠	宅地
3-12	塩部遺跡	塩部二丁目一帯他	弥生～奈良	宅地	"
3-13	加牟那塚古墳	千塚三丁目7	古	墳	草地



第3図 旧千塚村遺跡地図

#### 4. 旧里塚村

##### a 概要

この地区は、東側を板垣山、北及び西側を大笠山・愛宕山等の山々に囲まれ、そのほぼ中央を流下する高倉川によって造り出された小扇状地を中心とする地域一帯で、名刹普光寺・東光寺が所在するなど歴史的環境のすぐれている所である。北原扇状地と呼ばれるこの地域では、古くから群集墳の存在が知られており、既にいくつかの報告もなされている。また扇状地上以外でも、一つ塚古墳、大笠山1号・2号墳、山梨荘古墳、あるいは二つ塚1号～3号墳などが周囲の山腹や山頂付近の標高の高い地点に存在しており、古墳時代後期～終末期における群集墳地帯として注目されてきた地域である。



第4図 旧里塙村遺跡地図

近年では開発に伴う発掘調査もいくつか実施され、古墳以外の遺跡内容がより具体的になった。善光寺裏遺跡や北原遺跡は編文時代中期を主体とする遺跡でありまた本郷遺跡は主として古墳時代前期の五箇期から近世に至る遺跡であることが判明している。

今回の分布調査で明らかになった遺跡の状況をながめてみると、善光寺裏遺跡及び北原遺跡周

辺には縄文時代の遺物の散布が知られ、やはりこの付近を中心に縄文時代の遺跡が埋蔵されている様子をうかがうことができる。しかし、この地区全域旅游の様相からみると、縄文時代の遺跡は少なく、とくに古墳時代以降になって開発が促され、集落が営まれたものと推測できる。

古墳時代に入ると、前期の遺跡もあるが、数は少ない。しかしその状況から推測するとかなり深い地点に埋蔵されているため今後数多く発見される可能性を残している。一方、後期の遺跡は北原古墳群の状況を見る限り、かなりの遺跡が予想される。この北原古墳群は、江戸時代末から昭和20年代における農耕地化によって、ポンボコ原古墳、稻荷塚古墳など数基の古墳を残してほとんどの墳滅状態となっているが、古者の話などから徐々にかつての古墳群の実態が明らかになりつつある。今回の調査でも、さらに分布範囲が拡大する状況が判明し、一大群集墳地帯としての様相が浮かびあがってきた。またこれらの群集墳は、いくつかの例を除いて、扇状地の扇頂部分に近い地域に存在しており、反面集跡は扇尖ないし扇端部分に広がる様子を見せ、墓域と集落跡の占地の違いをうかがわせている。

多くの遺跡群が北原扇状地上に展開する一方、大笠山水の元遺跡の立地は特異である。大笠山の中腹部分という標高の高い地点に所在しており、その性格や特質に興味深いものがある。付近はちょうど鞍部の平坦地形を呈し、また湧水も付近にあり集落を営むには都合が良い。山腹ないし山頂にある古墳群と何らかのつながりを想定しなければならないし、またそれらの古墳群の性格を追究するうえで貴重な遺跡となろう。

平安時代の遺物はほぼ万遍なく散布しており、この時間に広範囲に集落が展開した様子がうかがえる。また中世以後の遺物も多く、特に善光寺南方の地域には目立っている。殿屋敷の字名や板垣氏の伝承などを総合してこの付近には中世の豪族屋敷や集落跡の存在が予測されよう。

#### b 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
4-1	茶堂遺跡	善光寺町3000他	平安～	畠	散布地
4-2	無名冢	善光寺町3162裏	古墳？	畠	古墳？
4-3	北善光B遺跡	善光寺町2858-15	古墳～	畠	散布地
4-4	北善光A遺跡	善光寺町3038-3	平安～	畠	散布地
4-5	提下B遺跡	東光寺町堤下 1421～1426	平安～	畠	散布地
4-6	提下A遺跡	東光寺町1490	平安～	畠	散布地
4-7	北原遺跡	東光寺町北原1313他	縄文・平安	畠	散布地
4-8	善光寺北遺跡	善光寺町2770他	縄文・平安～	畠	散布地
4-9	地蔵北遺跡	東光寺町3丁目 を中心とする地域	古墳～平安	畠・宅地	散布地
4-10	亥ノ鬼遺跡	東光寺町3丁目 字亥ノ鬼	平安～近世	畠・宅地	散布地
4-11	大六天遺跡	東光寺町2丁目 字大六天	平安～近世	畠・宅地	散布地

4-12	宮ノ脇 A 遺跡	善光寺二丁目 字宮ノ脇	繩文～平安 ～近世	烟	散布地
4-13	南善光 B 遺跡	善光寺三丁目 35他	古墳～平安	烟	散布地
4-14	南善光 A 遺跡	善光寺三丁目 3335他	平安～	烟	散布地
4-15	無名塚	善光寺三丁目 34	古墳？	現在は消滅	古墳
4-16	殿屋敷遺跡	善光寺三丁目 33	平安～近世	烟	散布地
4-17	宮ノ脇 B 遺跡	善光寺二丁目 字宮ノ脇	繩文～平安～	烟	散布地
4-18	宮裏遺跡	東光寺二丁目字宮裏	平安～	烟	散布地
4-19	銀杏之木遺跡	東光寺二丁目 字銀杏ノ木	平安～近世	烟	散布地
4-20	六反田遺跡	東光寺二丁目 字六反田	平安～近世	烟	散布地
4-21	御崎田遺跡	東光寺二丁目 字御崎田	平安～	烟	散布地
4-22	上郷遺跡	善光寺二丁目 字宮ノ脇、上郷	平安～近世	烟	散布地
4-23	ボンボコ塚	善光寺町 2420	古墳	烟	石室残存
4-24	本郷遺跡	善光寺三丁目字本郷	古墳～近世	烟	散布地
4-25	宮ノ前遺跡	善光寺二丁目 字前ノ内	繩文	烟	散布地
4-26	東光寺遺跡	東光寺1-12他	平安～近世	烟	散布地
4-27	本郷B遺跡	善光寺三丁目字本郷	平安～近世	烟	散布地
4-28	本郷C遺跡	善光寺一丁目字本郷	古墳～中世	烟	散布地
4-29	大笠山水の元遺跡	東光寺地内	古墳～	愛山広域公園	散布地
4-30	大笠山3号墳	東光寺町	古墳	山地・子供の 園ゲート上	ほぼ全壟
4-31	大笠山1号墳	東光寺山山腹	古墳	山林	半壟
4-32	大笠山2号墳	東光寺山山腹	古墳	山林	半壟
4-33	一つ塚古墳	東光寺山東北山腹	古墳	山林	
4-34	夢見山古墳	愛宕山山頂	古墳	山林	
4-35	善光寺塚2号墳	善光寺町内	古墳	烟	
4-36	善光寺塚1号墳	善光寺町内	古墳	烟	
4-37	北原無名1号墳	善光寺町	古墳	烟	
4-38	細荷塚1号墳	善光寺町 1522	古墳	烟	円墳
4-39	積荷塚2号墳	善光寺町 1522	古墳	烟	円墳
4-40	三日月塚古墳	善光寺町 2855	古墳	烟	
4-41	地蔵塚古墳	善光寺町内	古墳	烟	
4-42	鎧塚古墳	善光寺町 3307	古墳	山地	
4-43	北原無名2号墳	東光寺三丁目 13	古墳	宅地	地場産業セ ンター消滅
4-44	おめ塚古墳	東光寺町	古墳	宅地	墳形消滅
4-45	不老園古墳	不老園内	古墳	烟	

4-46	山崎無名墳	酒折町	不明	宅地	消滅
4-47	酒折繩文遺跡	酒折町三丁目 李木町	繩文	畠・学校	散布地
4-48	酒折遺跡	酒折三丁目8	近世		散布地
4-49	内林遺跡	酒折町一丁目宇内林	近世		散布地
4-50	夢見山古墳	愛宕山山頂	古墳	山林	
4-51	法印塚古墳	善光寺町内	古墳	畠	墳形は消滅
4-52	酒依氏館跡	酒折町字屋敷ノ丁	中世	宅地	
4-53	茶堂烽火台	東山山腹北	中世		

## 5. 旧甲連村

### a 概要

市街地北東部の山付き地帯と大山沢川・平等川流域の沖積地に位置する旧甲連村では、これまでも、川田瓦窯跡・大坪遺跡・山田古墳等の遺跡が知られていた。しかし、最近、北山野道設置事業の現地調査等により、ほぼ一面に古墳時代から平安時代の遺物の分布が認められた地域である。

河川や水路あるいは旧池沼等により微高地状となった部分に、古墳時代から平安時代にかけての遺物の散布が多いことが今回確認された。その中でも、「甲斐國山梨郡表門」のヘラ書き土器が発見された大坪遺跡は、長径 500 m を超える大集落の可能性が強く、この地域では中心的な存在をなすと思われる。そして、大坪遺跡の東に臨む川田では、古くから窯跡が知られ、また今回の調査で、桜井町出土器にも窯跡が発見されたことなどから考えても、工人集団のムラを形成していた可能性が大きい。

縄文時代は、山付き地帯に 2カ所の遺跡が確認された。いずれも中期のものである。沖積地では、数期の遺跡が発見されなかったものの、堆積した上砂の下層に文化層が埋まっていると思われる。

### b 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
5-1	鍋煙堂遺跡	横根町三ツ石	繩文	畠・山林	散布地
5-2	三ツ石遺跡	横根町三ツ石	繩文・平安	畠	散布地
5-3	平林灌木遺跡	横根町 1180 他	繩文	畠	散布地
5-4	中尾敷遺跡	桜井町 790 他	縄文・古墳 近世	畠・宅地	散布地
5-5	八木沢遺跡	横根町 831 他	縄文・古墳 ～近世	畠	散布地
5-6	山田遺跡	横根町 1114 他	中世・近世	畠	
5-7	山田古墳	横根町 1114 他	古墳	畠	古墳



第5図 旧甲連村遺跡地図

5-8	村内遺跡	横根町825~832他	縄文・古墳 ~平安・近世	烟	散布地
5-9	横根村内1号墳	横根町1065	古墳	烟	古墳
5-10	横根村内2号墳	横根町	古墳	烟	古墳
5-11	村内西遺跡	横根町1087他	近世	烟	散布地
5-12	村内南A遺跡	横根町1049他	近世	烟	散布地
5-13	矢下・大畑遺跡	横根町矢下・大畑	近世	烟	散布地
5-14	村内石山遺跡	横根町1146他	近世	烟	散布地
5-15	山崎遺跡	横根町19-1他	近世	烟	散布地
5-16	村内南B遺跡	横根町村内	近世	烟	散布地
5-17	船山遺跡	横根町1160他	古墳・奈良	烟	散布地
5-18	大坪遺跡	横根町大橋・大坪	古墳~近世	烟・河川	包藏地
5-19	十八田遺跡	桜井町十八田537	近世	烟	散布地
5-20	見餅遺跡	桜井町見餅474他	近世	烟	散布地
5-21	長沢遺跡	和戸町長沢1060他	近世	烟	散布地
5-22	在原塚	和戸町	古墳	烟	古墳
5-23	清水遺跡	桜井町清水919他	中世・近世	烟	散布地
5-24	中組遺跡	桜井町中組944他	近世	烟	散布地
5-25	桜井積石塚古墳群 西支群	桜井町地内	古墳	山林	積石塚22基
5-26	新煙遺跡	桜井町新烟978他	近世	烟・宅地寺院	散布地
5-27	桜井積石塚古墳群 東支群	桜井町地内	古墳	山林	積石塚3基
5-28	東組遺跡	桜井町東組1022他	中世・近世	烟・宅地	散布地
5-29	地蔵堂遺跡	桜井町地蔵堂45他	縄文・古墳 奈良	宅地	散布地
5-30	上土器遺跡	桜井町上七器246他	古墳~平安 近世	烟	散布地
5-31	上土器窯跡	桜井町上土器254他	奈良	烟	瓦窯跡
5-32	梅之木遺跡	桜井町石川394他	古墳	烟・宅地	包藏地
5-33	石川遺跡	川田町石川116他	近世	烟	散布地
5-34	横田遺跡	横井町横田407他	近世	烟	散布地
5-35	起田遺跡	川田町起田59他	古墳~近世	烟	包藏地
5-36	八枚畑A遺跡	和戸町小牧田1140他	古墳~近世		散布地
5-37	龟田遺跡	川田町龟田134他	古墳~近世	烟	散布地
5-38	川田窯跡	川田町北田231他	奈良		瓦窯跡
5-39	北田遺跡	川田町北田255他	古墳~平安 近世	烟	散布地
5-40	久保田遺跡	川田町久保田325他	古墳~平安	烟	散布地
5-41	八枚畑B遺跡	和戸町八枚畑259他	近世	烟	散布地

5-42	桜井畠遺跡	和戸町桜井畠1274他	奈良・平安世 紀	畠	散布地
5-43	北村遺跡	川田町北村381他	近世	畠・宅地	散布地
5-44	川田館跡	川田町東田408~423	中世	畠	武田信虎跡
5-45	満々上遺跡	和戸町満々下	平安~中世	畠	散布地
5-46	天王社古墳	桜井町天王社東	古	墳山林	やや割らる ていてい
5-47	芭毬塚古墳	和戸町321	古	墳	全塚
5-48	太神さん塚古墳	和戸町内森183	古	畠	全塚
5-49	富士塚古墳	和戸町内	古	墳	全塚
5-50	横根積石塚群西支群	八人山東斜面	古	墳山林	積石塚 105基
5-51	熊根積石塚群東支群	八人山東斜面	古	墳山林	積石塚 11基

## 6. 旧池田村

### a 概要

旧池田村は荒川の右岸に位置し、貞川と荒川に挟まれている。西方は釜無川を挟んで赤坂台地へと続くが、池田村は荒川により開拓された扇状地に位置する。ここでは一部に縄文時代の遺物が認められるものの、ほとんどは平安時代の遺跡である。池田二丁目から中村町にかけて、坏の口縁部の破片が希薄ながら点在している。荒川と貞川は荒川橋のやや下流で合流するが、貞川はしばしばその流路変えていたと言われており、現在の新田町から下飯田にかけては、沖積地なのかもしれない。

千松橋の両側、荒川から2.5kmほどの辺には穴塚が存在する。現在は甲府市の史跡に指定されており、古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳である。

荒川をやや上流に上った千塚や、敷島町牛久にも同期の円墳が点在することから考え、荒川の流路に大きな変化はなく、古墳時代には、一種のムラ的要素の濃い集団の存在を示唆する貴重な資料であろう。

### b 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
6-1	穴塚	荒川二丁目13	古	草地	市史跡
6-2	西河原遺跡	荒川二丁目5	縄文・平安	田	
6-3	平石遺跡	荒川二丁目1	平安	田	
6-4	居村・村上遺跡	池田二丁目11	平安	田	
6-5	前田遺跡	池田二丁目6	平安	田	
6-6	豆田遺跡	中村町油田三丁目		田	



第6図 旧池田村遺跡地図

## 7. 旧 貢 川 村

### 概 要

現在の貢川の南に位置し、上石田・貢川・施行・富竹が含まれる。貢川の流路はしばしば変わり、従って、沖積地になるが、等高線の方向などから考えて釜無川沖積地上に位置していると思われる。上石田遺跡は古くから知られている縄文時代中期の遺跡であるが、甲府市内の該期の遺跡の多くが扇状地上に立地するのに対して、性格を異にしている。

中心部からは西に離れているが、やはり宅地化の波は及んでおり、範囲を確認することは非常に困難であった。そのような状況の中でも、やはり縄文時代から平安時代に至るまでの遺跡が数カ所確認されている。



第7図 旧實川村遺跡地図

上石田遺跡は昭和47年に、区画整理事業に伴い調査された縄文時代中期の遺跡である。標高約263m、盆地底部の低湿地に立地する。今回の調査でもその範囲を明確にすることはできなかった。

また、古墳時代以後の遺跡についても、遺物の分布する密度が薄く、範囲を明確にするまでには至っていない。沖積地ということもあり、文化層上に土砂が厚く堆積しているのかもしれない。

今後の工事に際しては、今回遺物の散布が認められた地域を重点的に注意していかなければいけない地域である。

#### b 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
7-1	南阿原B遺跡	富竹町南阿原1045他	平安	畠	散布地
7-2	南阿原A遺跡	富竹町南阿原981他	平安	畠	散布地

7-3	南阿原C遺跡	富竹町南阿原963他	平安	畠	散布地
7-4	南阿原D遺跡	富竹町南阿原1023他	平安	田	散布地
7-5	村西遺跡	徳行政村西1894他	繩文・平安 中世	畠	散布地
7-6	上石田遺跡	上石田字中村	繩文・平安	畠	集落跡
7-7	下石田遺跡	下石田二丁目	平安	畠	散布地
7-8	上河原遺跡	下石田二丁目4	平安	畠	散布地
7-9	波沢遺跡	下石田二丁目12	平安	畠	散布地

## 8. 旧玉諸村

### a 概要

市域の東部に位置する玉諸村は、平等川で石和町との境を接し、それに沿うような形で渕川も貫流する。笛吹川とは、現在では中道橋付近で合流するが、古くは平等川の流域がそのまま笛吹川であり、明治43年の洪水の際に流域を変えている。この地区は、笛吹川の氾濫原であり、沖積地である。

古くから知られている遺跡としては、増坪遺跡・上町遺跡などであるが、今回の調査により、ほぼ一面に、弥生時代から平安時代・中世に至るまでの遺跡の分布が確認された。特に渕川流域に多く集中し、個人所有に限らず表面採集においても、大きな破片が多く集中している地域である。また道路や用水路の改修、田畠の耕作においても土器の出土は顕著であり、里吉四丁目の寺前遺跡においては10年ほど前にゴミ穴を掘った際、地下約1mの所から、完形の五輪期の器台が検出されている（小松良一氏教示）。

玉諸村の西側、旧市街地にあたる朝氣遺跡では、過去5回の調査により、地下約1m～3mにかけて、平安時代から繩文時代に至る遺物が検出され、低湿地に位置する遺跡のありかたが改めて問われているが、玉諸においても、同じ時期・同じ性質の遺跡が多く分布し、あるいは、個々に独立せず広大な一集落を形成していた可能性が大きいとも思われる。

一方時代が下り中世になると、渕川左岸の国玉町内に、落合氏の館跡が確認された。現在でも堀と土塁が良好に残っている。この館跡に伴うその他の遺構は確認されていない。

また、玉諸村北部においては、塚が3基確認されている。いずれも古墳であるが、道路の拡張により一部削り取られたり（藤塚）もしている。

### b 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
8-1	中坪遺跡	里吉2丁目342, 286	古墳～平安	畠	散布地
8-2	天神遺跡	里吉1丁目3 里吉3丁目3	古墳～平安	畠	散布地
8-3	家之前遺跡	里吉3丁目2, 5, 6	古墳～平安	畠	散布地



第8図 旧玉踏村遺跡地図

8-4	十 丁 遺 跡	里吉三丁目 5-8	古 墳	烟	散 布 地
8-5	字 前 遺 跡	里吉四丁目 678	古 墳 ~	烟	散 布 地
8-6	大 橋 遺 跡	国玉町大橋	中 世	烟	散 布 地
8-7	落 合 氏 館 跡	国玉町一ノ坪	中 世	烟・宅 地	館 跡
8-8	五 本 松 遺 跡	国玉町五本松 465	不 明	烟	散 布 地

8-9	鎌作 遺跡	国工町鎌作	中世・平安	烟	散布地
8-10	深田 遺跡	国工町深田	中世・平泉	烟	散布地
8-11	塚腰 遺跡	国工町塚腰	平安	烟	散布地
8-12	態社 遺跡	蓬沢町 833-2	弥生～古墳	烟	散布地
8-13	村之内 遺跡	里吉四丁目 10	古墳～平安	烟	散布地
8-14	北堀 遺跡	里吉町北堀廻	古墳～平安	烟	散布地
8-15	油田 遺跡	蓬沢一丁目字油田	平安	烟	散布地
8-16	北桜 遺跡	蓬沢一丁目字北桜	平安	烟	散布地
8-17	野村 遺跡	蓬沢一丁目字野村	古墳～平安	烟	散布地
8-18	居村 遺跡	蓬沢一丁目字居村	不明		
8-19	潤之上 遺跡	蓬沢一丁目字潤之上	古墳	烟	散布地
8-20	藤 塚	上阿原町塚越	古墳	宅地・道路	古墳
8-21	京 塚	上阿原町	古墳		古墳

## 9. 旧国母村

### 概要

旧国母村は、荒川の右岸、沖積地上に位置する。等高線の間隔が広く北西から南東に向かってわずかに傾斜している。現在では高畠・下石田・国母・古上条・上条新居・上小河原・後屋の各町が存在する。

高畠と国母の境には沼川が流れ、このほかにも小河川の数が多く、水田地帯が広がる。上石田遺跡に続く位置のため、やはり低湿地帯だったことは十分に予測できる。

このような状況の中、遺跡の分布は散漫であり、荒川と沼川に挟まれた三角地帯、現在の高畠にわずかに認められる、との報告である。しかし他の沖積地同様、土砂の堆積が厚く、遺跡確認に困難な状況であったことは否めないであろう。

高畠で認められた遺跡は4カ所、いづれも平安時代から中世にかけての遺跡であるが、1カ所宮北遺跡で認められた櫛文土器片は上石田遺跡とのつながりを示し、上石田遺跡の範囲確認において貴重な資料と思われる。そしてまた、それを含んだこれら4カ所の遺跡は、宅地化により必ずしも明確な範囲ではなく、逆に言えばすべて同一の遺跡の可能性が強い。

遺跡と位置を同じくして秋山氏館跡と思われる遺跡が確認された。現在でこそ改修されているものの、西北から東へ堀が巡り、また土塁の一部の、やや高まった遺構が現存する。また館跡の一角にあたる秋山輪正氏宅には、多数の古文書が保管されており、さらに中世の壺が保管されていることなどから考えても、秋山氏館跡の存在はほぼ確実であろう。



第9図 旧国母村遺跡地図

**b 遺跡一覧表**

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
9-1	久保北河原遺跡	高畠三丁目 字久保北河原	平安	畠	散布地
9-2	大北河原遺跡	高畠一丁目 字大北河原	平安	畠	散布地
9-3	宮北遺跡	高畠一丁目字宮北	編文・平安 中世	畠	散布地
9-4	村前遺跡	高畠一丁目字村前	平安・近世	畠	散布地
9-5	秋山氏館跡	高畠1-21	中世	宅地・寺院 畠	
9-6	姫見塚	国母八丁目11	不明	畠	塚

## 10. 旧住吉村

**a 概要**

荒川と渕川とに挟まれた沖積原上に位置している。標高255m前後の地で、等高線の間隔が極端に広く、村内の最高所と最も低い所との標高差は、わずかに1m程しかない。

この地域では古くから上町遺跡や増坪遺跡等の名が知られており、弥生時代後半から平安時代にかけての遺跡が多い。今回の調査でもやはりその時代の遺跡の発見が相次ぎ、北方に位置する玉諸村と同様の様相を呈するため、あるいは一連の大集落が形成されていた可能性も強いかと思われる。

弥生時代の遺物が検出される宮田遺跡は、範囲南側のバイパス寄りに同時代の遺物が多く分布しているが、北方は、水田ということもあって、少ない。それに続く古墳時代から平安時代にかけては、二又遺跡を除いては、複合遺跡と考えられ、広く分布している。

一方中世の遺跡として確められた土尻遺跡からは、多量の土師質土器が分布していた。調査時点では水田一枚分がやや深く掘られていたため確認されていたものだが、範囲はさらに拡がるものと思われる。同じく中世の屋敷跡の可能性が強い地域として、現在中小河原一丁目の小宮山土佐守館跡があげられる。甲斐国志中に記載されており、現在の字古尾敷の地名が、その位置ではないかと思われている。

このように、旧住吉村は旧玉諸村との一連性と思わせ、多くの遺跡の発見が確認できた地域である。

**b 遺跡一覧表**

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
10-1	住吉遺跡	住吉二丁目	不明	畠・宅地	散布地
10-2	二又遺跡	住吉四丁目字二又	古墳	畠	散布地
10-3	上ノ木遺跡	住吉五丁目字上ノ木	古墳～平安	畠	散布地
10-4	宮田遺跡	住吉五丁目字宮田	弥生～平安	畠	



第10図 旧住吉村遺跡地図

10-5	明石・西河原遺跡	上町字西河原字明石	平 安 煙	
10-6	大上井遺跡	上町字大上井	平 安 桑 煙	
10-7	天神遺跡	上町字天神	古墳～平安	煙
10-8	土尻遺跡	下小河原町字土尻	中 世 水 田	
10-9	外河原デタヤ遺跡	増坪町字デタヤ他	古墳及び平安 道路 溝川	ブドウ 煙
10-10	人形塚古墳	職業訓練校脇	不 明 宅 地	消 減
10-11	小宮山土佐守館跡	下小河町字屋敷	中 世	

## 11. 大鎌田村

### a 概 要

現在の荒川右岸を中心として、沖積地上に位置する大鎌田村には、現在、大里町・宮原町・細



第11図 旧大藏田村遺跡地図

之内町・高室町が存在する。北西部には国母工業団地が進出し、中巨摩郡玉穂町と境を接する。北から南へ非常に緩やかに傾斜する地である。これまで遺跡の存在は知られていなかったが、今回新たに12カ所の遺跡の報告がなされた。

国母工業団地の中に位置する砂間遺跡は、団地建設に際して土器片が採集できたと伝えられ、いわゆる包蔵地と思われるが、現在では遺物の採集が不可能であり、聞き取り調査で可能な限りの範囲の記入に留まつた。また、現在の中央高速道路下に中世の遺物の散布が認められる遺跡の

範囲もおおよその推定範囲である。

そのほか、古墳時代の遺物の散布が認められる桜林A遺跡、中世の金山遺跡、近世の西耕地A・B遺跡など、旧大謙田村内でも連続とした生活が営なれていたことがわかる。

#### b 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
11-1	大北耕地遺跡	大里町大北耕地 1320他	中世～近世	畠・水田	
11-2	桜林A遺跡	宮原町桜林	古墳～中世	桑畠	
11-3	東耕地遺跡	大里町東耕地	平安～中世	桑畠	
11-4	桜林B遺跡	宮原町桜林249	平安～中世	ブドウ畠	
11-5	西耕地B遺跡	大里町西耕地4398	中世以後	宅地	
11-6	西耕地A遺跡	大里町西耕地	中世以後	桑畠・宅地	
11-7	西耕地C遺跡	大里町西耕地	中世以後	桑畠	
11-8	堰添遺跡	宮原町堰添	不明	工業団地	
11-9	砂間遺跡	高室町砂間	平安～中世	畠	
11-10	村前遺跡	堀之内町村前374他	中世	桑畠	
11-11	金山遺跡	高室町金山	中世	桑畠	
11-12	柿ノ久橋遺跡	高室町柿ノ久橋	平安～中世	桑畠	

### 12 旧山城村

#### a 概要

荒川と笛吹川に挟まれた冲積地上、標高約253mの地に位置する旧山城村は、現在では、小瀬・上今井・西油川・下鍛冶屋・落合の各町が位置する。61年度国民体育大会が開催されるにあたり、メイン会場を建設するなど、ここ数年で様相が一変した地域である。冲積地であるため非常に平坦だが、それと同時に洪水に見舞われることも多く、現在でも軒先に舟を備えておく民家がある。

従って、この地域で遺跡を見出すことは非常に困難であり、国体開会場周辺の工事現場やその他、堀削を実施している地域について確認作業を試みたが、遺物は発見できなかった。

県営小瀬団地の一隅に、櫛に仕切られた一角があり、この地で非運の最期を遂げた源有雅郷の墓が祀られているが、この地には富士塚古墳の名称のみが残る。現在は、有雅郷の墓と木が一本あるだけで、古墳の面影はない。

また、中世の尼教跡としての小瀬氏館跡は、現在、土壘状の微高地が若干認められる。またこの地は、その後玉田寺が造営されていた地と言われ、数基の石仏が当時を忍ばせている。

いづれにしても山城地区は、古くから洪水がたびたび起こり、遺跡が流失した可能性も強いだろう。



第12図 旧山城村遺跡地図

b 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
12-1	富士塚	小瀬団地東	古墳	公園	市史跡
12-2	小瀬氏館跡	小瀬町 598 他	中世	荒地	玉田寺跡地



第13図 旧朝井村遺跡地図

### 13. 旧朝井村

#### a 概 要

荒川と笛吹川とに挟まれた沖積地上、現在の中町・東下条町・下今井町・小曲町が旧朝井村である。北側の旧山村同様、標高差はほとんどなく、古くから溝川の氾濫源であった。

土砂の堆積も厚く、遺跡の確認は困難であることも、旧山村と同様である。やや南部を中央高速道路がほぼ東西に走っているが、その工事に際しても遺物が検出された、という情報はなく、散布地皆無の地域である。

ただ一ヵ所、甲斐国志の記述から推定して小曲氏屋敷跡の存在が考えられる。現在の小曲町94

番地、小曲神社の地は、一辺50m程の正方形をして、周囲よりも若干高い。そしてまた、現在鎮座している小曲大明神の祭神が小曲五郎長家、ということからも、屋敷が存在していた可能性は高いのではないかろうか。

笛吹川を挟んで対岸の曾根丘陵上に多くの遺跡が存在しているのに対し、あまりにも極端な相違があるが、両者の性格的な関係も、今後の課題となるだろう。

b 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
13-1	小曲氏館跡	小曲町村東	鎌倉	神社	消滅

#### 14. 旧二川村

a 概要

甲府市の最南端、荒川と大鎌田川に挟まれた沖積地が旧二川村である。現在は西下条町・大津町が位置している。この地域は笛吹川を挟んで中道町の曾根丘陵に接している。しかし遺跡の散布は曾根丘陵とは対照的に非常に希薄である。二つの河川に挟まれているため、土砂の堆積が著しく、発見が困難なのかもしれない。

大津町内に認められた村派遺跡は唯一の平安時代の散布地である。表探された遺物の量は少ないが、今後注意が必要である。また西下条町内の刀剣塚古墳は、封土が若干削平されてはいるが、比較的残りのよい古墳である。市南部に唯一存在する古墳として、その価値は高いではなかろうか？

旧二川村はまだまだ耕作地が多いとは言うものの、年々開発が拡がっている。そして、工業団地あるいは、下水の終末処理場など、広大な敷地を必要とする工場等も進出してきている地域である。

b 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
14-1	刀剣塚古墳	西下条町	古墳		古墳
14-2	村派遺跡	大津町村派	平安	桑畠	



第14図 旧二川村遺跡地図

## 15. 旧市域

### a 概要

旧市域は現在の市街地とほぼ一致する。この地域は甲府盆地全体からみると底部の低湿地帯にあたる。つい最近甲府駅ビルの建設がおこなわれ、また駅南口の再開発事業は現在進行中である。山梨県の県都として20万人の人口を擁する甲府市は、大きく発展している。従って駅周辺部における分布調査・聞き取り調査は実際不可能に近く、駅前の工事現場をのぞいても、遺物の散布や包蔵はほとんど確認できなかった。ただ一ヵ所、たまたま住宅の改築に際して出土した上器・石器等を保管していた深沢勝義氏宅を包蔵地として記録した。

甲府城は、武田氏滅亡後甲府代官平岩親吉により築城された。築城以前は一条小山と呼ばれ、現在太田町にある一蓮寺が存在していた。築城期の範囲は相当広く、北東端は、愛宕山麓に接していたと言われるが、その範囲を明確にするには至っていない。

昭和59年度に県教育委員会で発掘調査を実施した飯田一丁目遺跡からは、弥生時代の土器と古墳時代の住居跡と思われる遺構および遺物が検出されている。しかし低湿地に位置するこの遺跡のことで、はっきりとした住民跡のプラン確認には至っていない。

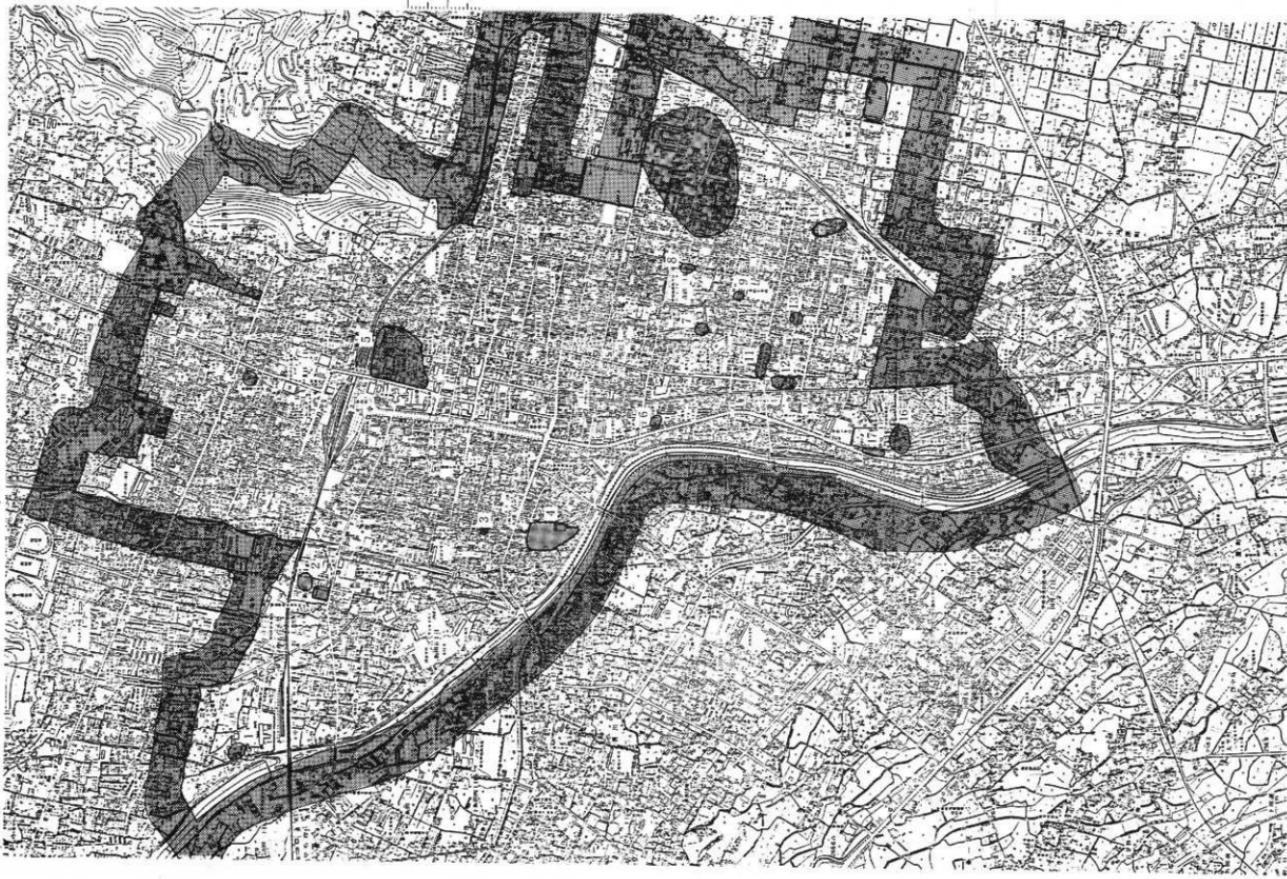
また、現在の県民文化ホールを建設する際にも、多くの土器が検出されたと伝えられ、包蔵地として記録してある。

旧市域の東部、現在の東小学校およびその周辺は、朝氣遺跡として知られる、繩文時代から平安時代に至るまでの複合遺跡であり、また低湿地に立地する遺跡のため土器ばかりでなく木器や植物遺体の残存状況が非常に良好な遺跡である。地表下1m～3mにかけて各時代が層位的に捉えられ、市内でも第1級の遺跡である。過去5回の調査が実施されている。

そのほかに伊勢町・幸町などでも遺跡が確認され、弥生時代後半から古墳時代にかけての遺物が認められているが、土砂が厚く堆積しているため、表面採集が困難な地域となっている。

### b 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	地目	備考
15-1	富士見遺跡	富士見一丁目	古墳・平安	田・畠	散布地
15-2	飯田一丁目遺跡	飯田一丁目2他	弥生・古墳	宅地	塚部遺跡の一部
15-3	宝町遺跡	宝二丁目15他	繩文・平安	宅地	包蔵地
15-4	寿町遺跡	寿町21他	不明	宅地	包蔵地
15-5	甲府城跡	丸の内一丁目	近世	公園	史跡
15-6	千松院遺跡	相生三丁目8他	中世	寺	散布地
15-7	太田町遺跡	太田町10の2他	古墳・中世	神社	〃
15-8	青沼遺跡	青沼三丁目5他	古墳	校庭	〃
15-9	湯田町遺跡	湯田一丁目8他	古墳	校庭	〃



15-10	朝 気 遺 跡	朝氣 - 丁目他	弥生～平安 中	宅地・道路	集落址
15-11	伊 势 町 遺 跡	幸町・太田町境付近	古 墳	道 路	包 藏 地
15-12	食 稲 工 場 遺 跡	幸町 6-30 他	繩文・弥生	工 場	散 布 地
15-13	幸 町 遺 跡	幸町 13 他	弥 生	道 路	包 藏 地
15-14	南 口 遺 跡	南口 15 他	古 墳・平安	宅 地	散 布 地
15-15	青 葉 町 遺 跡	青葉町 12	古 墳～平安	烟・宅 地	〃
15-16	般 舟 院 跡	伊勢三丁目	近 世	宅地・道路	寺 院 跡
15-17	木 侯 遺 跡	伊勢三丁目 8	不 明	荒 地	散 布 地
15-18	横 田 氏 館 跡	飯田一丁目字横田	中 世	宅 地	
15-19	新 緒 屋 遺 跡	武田一丁目	近 世	宅 地	新緒屋小学校 庭

## IV ま と め

今回初めておこなった詳細な遺跡分布調査により、これまで20数カ所とされていた遺跡が200カ所以上知られたことは、第1に掲げるべき大きな成果と言えよう。また、既に調査された積石塚や古墳・城館等を含めると総数400にも達し、改めて、古人たちが、ほぼ市内全域で生活していたことがわかる。

現在でも甲府盆地の湖水伝説が広く伝承されているが、既に5,000年前からは、市内のあちらこちらで生活が開始され、途絶えることなく現在の私たちにまで受け継がれているのである。

ある時には洪水にみまわれ、またある時には火山の噴火など、長い年月を経る間には、幾多の自然災害に遭遇し、そのたびに新居地を求めて旅立った古人もいたかも知れない。しかし、残った者たちは、時には家の建て方をかえ、またある時には土器の形や焼き方を変えて過去の方法を受け継ぎながらも新しい方法を取り込んできた。このようにして文化が進歩し現在に至っているのだろう。

明治維新から今日までわずかに百余年。この間に社会・経済・文化は急激に進歩した。3万年も4万年も続いている日本人の歴史から考えるとほんの一瞬の時間である。アイドル歌手やヤングファッショングループがめざましく変化するのと同様、文化も急速に進歩し、ほんの3年前に時代の最先端と言わても今では時代遅れになる。

それだけに、過去何万年もの間に生活してきた古人たちの文化を現在に生きる私たちはついつい忘がちだが、あわただしい時代、ふっと過去の甲府に住んだ人々のことについて考えることも忘れてはならないのではないだろうか。

甲府市文化財調査報告 4  
甲府市の遺跡  
～甲府市内遺跡詳細  
分布調査報告書～

昭和61年3月発行

編集・発行 甲府市教育委員会  
〒400 甲府市丸の内一丁目18-1  
☎(0552)37-1161(内線299)

印 刷 (有)オザワプリント社

